**ラテンアメリカ・カリブ研究**　第 6 号: 17–27 頁 ©1999

〔論文〕

# 90 年代キューバ、アフリカ系カルトの行方

## ――「観光商品」化されるサンテリーア――

**工藤多香子**(Takako Kudo)*

### はじめに

1989 年にはじまったソ連・東欧社会主義圏の解体は、カリブ海の社会主義国キューバにきびしい試練をつきつけた。年間約 50 億ドルにものぼったソ連からの援助はほぼ消滅し、さらに貿易総額の約 80%を占めていた旧コメコン加盟諸国との取り引きは激減した。その結果、キューバは革命後最大の経済危機に直面したのである。国内の物資・燃料不足は深刻化していき、90 年 8 月ついにキューバ政府は「非常時」を宣言するに至った。燃料節減のため公共交通機関の運行は間引きされ、時間帯ごとに計画された停電が実施された。毎日の食料や生活必需品の入手すら困難となり、国民生活は困窮していったのである。

何よりも外貨の獲得が最優先課題となったキューバ政府は、それまで砂糖輸出に過度に依存していた経済構造を見直し、早急に外貨収入が見込める産業の育成に力を注いだ。中でも観光産業に対する政府の期待は大きく、その結果、観光施設の整備が急速に進められ、ホテルの新築・改築は現在に至るまで相次いで行われている。一部のホテル経営を外国資本に委託するなどの方針が功を奏し、1988 年には 30 万人程度であった外国人訪問客が 96 年に 100 万人に達し、外貨収入も 95 年に 10 億ドルを越えた[1)]。米国の経済制裁が続く不利な条件を背負いながらも、キューバの観光産業は順調に成長し、いまや砂糖を抜いて最大の外貨獲得産業に発展したのである。

さらに、国内経済の建て直しをはかるために政府は、91 年に外資の導入を促進する決定を下し、93 年 8 月には国民の外貨所持および使用を解禁、同年 9 月には一部の自営業を認可するなど、いくつかの経済自由化政策を実施した。これらの経済改革が進められた結果、90 年から 93 年にかけてマイナス成長を続けたキューバ経済は、94 年以降徐々に回復に向かっている[2)]。電力やガスの供給制限は緩和され、食料品や日用品はドルショップや 94 年に開設が認可された農産物自由市場で高価とはいえ購入できるようになり、国民生活はやや持ち直した。しかし、急速な観光化と外貨流通の浸透によって、90 年代以降、人々の生活は大きく様変わりしたのである。

キューバ政府は、このような経済改革を進める一方で、キリスト教やキューバに伝わる各種アフリカ系カルトなどあらゆる宗教の信者にとってさらに重大となる改革を実施した。経済状況の悪化がすすんでいた 1991 年に、第 4 回キューバ共産党大会が開催された。キューバ独自の社会主義体制の追求と国家再建の方針が討議された同大会において、宗教信者の入党がはじめて承認されたのである。さらに、党大会を受けて翌年実施された憲法改正では、宗教に関する条文の追加・修正がなされた。そもそも 1976 年に制定されたキューバ共和国憲法は、第 54 条で国民の信教の自由を保障し、いかなる宗教の信

* 東京外国語大学大学院

1) キューバの観光産業に関しては江口 1991 を参照されたい。また、近年の観光事情については山岡 1997 で触れられている。

2) ソ連崩壊以降のキューバ経済の動向に関しては、ポンス 1996、マルケッティ・ノダールセ 1996、佐野 1997 および山岡 1997 を参照。

者に対しても各自の信仰を実践する権利を等しく認めていた。しかし、同条文には「社会主義である国家は、科学的唯物論の概念に基づき行動し国民を教育する」という、国家の無神論的性格を規定する一節が含まれていたのである。92年の憲法改正では、同条文全体が修正されたとともに、先の一節が削除された[3]。そしてさらに、「宗教的自由 (la libertad religiosa)」の保障と政教分離とを定める第8条が新たに追加された。要するにキューバ国家は、もはや無神論を理念としないことを党員資格の変更と改憲によって明確にしたのである[4]。そして、この国家理念上の変化は、政府の行動にも反映され、具体的に実践されている。1998年1月に実現したローマ法王のキューバ公式訪問は、政府とカトリック教会との関係改善を国内外に印象づけるものであった。もちろん、政府が具体的な変化を示したのはカトリックとの関係においてだけではない。キューバに伝わるアフリカ系カルトの信者たちにとっても、91年の共産党の決議と92年の改憲は、彼らと政府との新しい関係が始まったことを知らしめるものであった。

本稿では、キューバのアフリカ系カルトの一つサンテリーア (santería)[5]を取り上げ、キューバ政府がこのカルトをめぐる政策を90年代以降どのように変化させているのかを検討する。さらに、その変化によって浮かび上がってきた、サンテリーア信者の新たな動向について、今後の展望を踏まえながら考察する。なお、90年代以降みられるサンテリーアの変化は現在進行中のプロセスであり、それに関する筆者の調査も予備的な段階にある。したがって、本稿は十分な資料に基づいた研究の最終的成果ではなく、いまだ継続中の研究の経過報告である。しかしながら、現在サンテリーア信者の間で生まれつつある新しい動向は、サンテリーアそのものが変容し、新たな局面を迎える可能性を示唆するものであり、現時点でその可能性を指摘することは意義あるものと筆者は考えている。

## 1. サンテリーア—知識上の権威の不在

スペインの植民地時代、アフリカ大陸から強制的にキューバに連れてこられた黒人奴隷の総数は、およそ70万〜100万人と推定されている。そのうちの約8割は19世紀に連れてこられた奴隷である。彼らがキューバにもちこんだそれぞれの郷土の信仰は、キューバの歴史的・社会的変遷の中で再編成を繰り返し、さらにカトリックなど他の宗教と習合した。その結果、いくつかのカルトが新たに形成された。サンテリーアはそのようなアフリカ系カルトの一つであり、ヨルバ系の宗教要素を多く受け継いでいる[6]。かつての黒人奴隷の信仰が基になっているとはいえ、今日に至っては、サンテリーアを「アフリカ系キューバ人の信仰」と考えることはできない。多くのヨーロッパ系キューバ人もまた、みずからの問題解決を求めてサンテリーアの占い師のもとに赴き、その中には入信儀礼を経て占い師となる者も数多くいるのである。またサンテリーアは、プランテーションが集中していたキューバ西部で形成されたものの、現在ではキューバ全国にわたって信者が広がって

[3] 76年憲法の第54条は、改正憲法の第55条に対応する。

[4] 1985年にブラジル人ドミニコ会修道士フレイ・ベトがカストロとのインタヴューを実現した。その中でカストロは、宗教信者に入党を認めないという規制は革命初期にカトリック教会が反革命を支持したという歴史的条件の中で必要になったと説明し、「われわれは無神論者となることを人に求めたのではない」と述べている (Beto 1987:230)。さらに、「同じ社会的義務を果たしながらも、宗教的信仰を理由にある人は他人と同じ権利を得られないという状況が存在するかぎり、われわれの革命事業は完成していない」とも表明している (*Op.cit.*:233)。これらのカストロの発言を考慮するならば、入党資格の修正と改憲は、無神論を理念としつつもキューバ社会に信者が存在するという現状を受け入れる一時的譲歩ではなく、無神論を国家理念としないことの明確な表明と受け取れる。なお、カトリック教会との政治的対立が歴史的背景にあったとしても、入党が認められなかったのはカトリック信者のみではなく、あらゆる宗教、カルトの信者があまねくその対象となった。

[5] 別名レグラ・デ・オチャ (regla de ocha)。ocha とは後述するサンテリーアの崇拝対象オリーチャ (orisha) の変化形である。また、キューバでは、本来「規則」を意味する regla が「カルト」の意味で用いられる。

[6] キューバに伝わる主たるアフリカ系カルトには、本稿が扱うサンテリーアのほかに、コンゴ系のパロ・モンテ (palo monte)、カラバリ系の男子秘密結社アバクア (abakuá) などがある。

おり、その意味でもキューバの「国民文化」となっている[7]。

サンテリーアの崇拝対象は、ヨルバで信仰されている神々に由来しており、その一部はカトリックの聖人・聖母と習合している。これらサンテリーアの神々はヨルバ語から派生したオリーチャ (orisha)[8]、あるいはサント (santo) と呼ばれる。

サンテリーアの信者となる主たる動機は、病気や恋愛など現実世界で直面する諸問題の解決、あるいは仕事の成功など目標や野心の達成祈願である。彼らは、託宣を通じてオリーチャの判断や助言を仰ぐ。主たる託宣の方法には、イファ (ifá) とディログン (dilogún) という二種類の体系の占いと、フィエスタと呼ばれる祭儀においてオリーチャが信者に憑依して告げるものとがある。占い師となれるのは、託宣によって選ばれ、その後しかるべき入信儀礼を経た入信者、つまりサンテーロ (santero) のみである。サンテーロには二種類あり、それぞれに異なる入信儀礼が行われる。一つは、特定のオリーチャの力を頭に「定着 (asentarse)」させる儀礼を経て、そのオリーチャと特別の関係を結んだ入信者である。この入信者はオローチャ (olocha) と呼ばれ、ディログンの占いを行う資格を持つ。もう一つは、オリーチャの中でも占いを司る神オルーラ (Orula) と関係を取り結んだババラオ (babalawo) である[9]。ババラオになれるのは男性のみとなっている。彼らは、ディログンよりも高位の託宣であるイファを執り行える唯一の入信者である。

ディログンでは、16 個の子安貝が用いられる。貝を落としたとき、口が上向きになったものの数が、基本となる 16 の卦の一つに対応する。なお、すべての貝が下向きに落ちた場合は凶兆であり、占いを中断して浄化のための儀礼を行わなくてはならない。占い師は先の作業を 2 回繰り返すことで、16 の卦を組み合わせた最終的な卦を得る。その数は 256 通りあり、それぞれの卦にはさまざまな神話や古諺が対応している。一方、イファもディログン同様に全部で 256 の卦から成るが、その体系はディログンと異なっており、それぞれの卦はまた別の神話・古諺群に対応している。イファには 16 個の椰子の種子を用いる方法と、椰子の実などでつくった表裏がはっきりした小片 8 つをつなげた鎖を使用する方法との二種類が存在する。ディログンとイファのいずれの場合にも、占い師は記憶した神話や古諺を手掛かりとしながら、依頼人の相談に答える。したがって優れた占い師となるには、記憶した神話・古諺群の量と経験が物を言うことになるのである。

サンテーロが学ばなくてはならないのは占いの知識ばかりではない。彼らは、口頭で伝承されてきた「ヨルバ語」の語句から成る、オリーチャへの祈祷や儀礼歌を暗記しなくてはならない。さらに、さまざまな儀礼や祭儀の進め方、儀礼に用いる植物に関する知識などの修得も課されている。サンテリーアには信仰上の権威を承認するような特定の組織は存在せず、またサンテーロ間の結びつきも、入信儀礼の際に結ばれる擬制的親族関係が基盤となっている。そのため、サンテーロは、サンテリーアに関する膨大な知識を擬制的な親子関係によって、主として口頭で、ときには個人的な覚え書きの転写によって学習していく。したがって、伝承される知識の量や内容には個人差があり、たとえば儀礼の最中にサンテーロ同士が儀礼の手順や占いの解釈をめぐって議論を交わすようなことは頻繁に起きている。このように、サンテリーアにはすべての信者が共有する行為上の規範や知識

---

[7] サンテリーアには信者であることを承認する制度化された組織は存在せず、信者として特定できる集団がいるわけではない。したがって、本稿ではサンテリーアを、崇拝対象オリーチャをめぐる実践ととらえ、その実践に加わる人々を信者と呼ぶこととする。

[8] ヨルバでは、崇拝対象となる神々を *òrìṣà* オリシャと呼ぶ。本稿では、「オリーチャ」をはじめ、キューバのサンテリーア信者が用いるヨルバ語起源の言葉を彼らの発音にならってかな表記する。 また、ヨルバ語起源の語彙の発音は信者によって異なることが多々あるが、本稿ではもっとも普及していると思われる発音を採用する。

[9] 「サンテーロ」が狭義で用いられる場合、ババラオを含まないことがある。

上の権威が存在しない。つまり、信者たちは各自が「真正」であると判断する知識にしたがってサンテリーアを実践しているのである。

## 2. キューバ政府とサンテリーア ―脱コンテクスト化から信仰の「観光商品」化へ

### (i) 脱コンテクスト化

革命直後、キューバ政府はアフリカ系カルトの儀礼音楽・舞踊を調査、保存する機関として、国立劇場にフォークロア部門を設立した。その活動目的は、抑圧され、搾取されてきた民衆の復権という革命政権のイデオロギーに基づき、「われわれの民衆の表現を把握し、その価値を歪めることなく新たに表現し直す」(León 1961:5)ことにあった。1961年に発行された同劇場の機関誌には、この部門の活動目的に関する次のような声明が掲載されている。「キューバのフォークロアの多くは遠くアフリカに由来するものであり、複雑にからみあった諸信仰と今日においても密接に関わっている。この場合、われわれは宗教的なるものの内面や特性から身を離し、歌、踊りそして詩の純粋な価値を舞台化することを心掛ける」(León 1961:5 下線筆者)。この声明に明らかなように、フォークロア部門を通して政府が行おうとしたのは、アフリカ系カルトそのものを保護することではなく、芸能的側面のみを信仰から脱コンテクスト化して保存・継承することであった[10]。さらに、1975年に第一回キューバ共産党大会が開催されたときにも、アフリカ系カルトに関する、儀礼音楽・舞踊の脱コンテクスト化の方針は再度確認されている。同大会では、アフリカ系カルトに関し、「これらの集団[アフリカ系カルト信者]を代表する民族が寄与している民俗的文化の諸価値―音楽、舞踊、楽器など―は、神秘的要素を取り除きつつ取り込まなくてはならない。またその諸価値のエッセンスを利用することが、科学的真実に無縁な習慣や規範の維持につながらないように心掛けるべきである」(PCC 1976:317 下線筆者)と論じられた。すでに述べたように1976年の時点でキューバ共和国憲法は信仰の自由を保障しており、政府はアフリカ系カルトの信仰そのものを禁止もしくは弾圧することはなかった。しかし、キューバ共産党を唯一の政党として成り立つキューバ政権は、社会主義教育が浸透するとともに信仰はやがて衰退していくであろうとの展望のもと、アフリカ系カルトの儀礼音楽・舞踊を脱コンテクスト化した上で保存する一方、信仰そのものを肯定的に評価することも、また、それに積極的に関与していくこともなかったのである。したがって、アフリカ系カルトが実践されていることを、政府がみずからすすんで国の内外に表明することはほとんどなかった。まして、サンテリーアの信者にとって実践の参考となりうる本を出版することはなかったのである。

しかしながら、1992年の改憲で無神論が国家の理念ではなくなったことによって、脱コンテクスト化を正当化する根拠は失われた。そして、政府が脱コンテクスト化の政策を修正していると思わせる事例は、改憲以前からすでに具体的に現れていた[11]。その一例が次に述べるサンテリーア関連書籍の出版である。

### (ii) サンテリーア関連書籍の出版

キューバ共産党が西・英・仏・独・葡語の5か国語で国外向けに発行している新聞『グランマ・インターナショナル(*Granma International*)』は、1991年3月10日付けの文化欄に「キューバのベスト・セラー―アフロキューバ宗教を理解する」と題した記事を掲載した。記事は、キューバに伝わるアフリカ系カルトの研究を長年続けてきたナタリア・ボリーバル(Natalia Bolívar)の処女作『キューバのオリーチャ(*Los orishas*

[10] 革命後の政権によるサンテリーアの脱コンテクスト化については、工藤 1998 を参照されたい。

[11] 1987年にヨルバの宗教上の最高指導者アライイェルワ・オバ・オクナデ・シジュワデ・オルブセ二世がキューバ政府の招待に応じてキューバを訪問している。この訪問を、サンテリーアに対する政策変更を象徴するできごととしてとらえる研究者やジャーナリストがいる(Moore 1988, Oppenheimer 1992)。

*en Cuba*)』が発売直後から反響を呼んでいることを報じている。この本は 1990 年末に、キューバ政府が業績を認めた作家や芸術家のみが加盟できる権威ある組織、キューバ作家・芸術家協会 (Unión de Escritores y Artistas de Cuba: UNEAC) から出版された。同書でボリーバルは、オリーチャごとにその神話や諸特徴、供物の種類などを、分析を加えることなく記述している。さらにこの本では、サンテリーアに関する知識を何らもたない者には耳慣れない専門用語や文章が、しばしば何の説明もなく登場する。明らかにこの本はサンテリーアに関してすでにある程度の知識をもち、かつ、その知識をさらに深めようとする人、すなわちサンテリーアの知識を学ばなくてはならない信者を対象にして書かれているのである。上述の記事は、いわばサンテリーアの実践に関する参考書といった趣のこの本を、「たとえ一時的貸与であっても、なんとか入手したい」と望む人が多くいることを報じている (Colina 1991)。脱コンテクスト化の政策下では決して出版されることのなかったこの種の本がいかに多くの信者に待望されていたのかを、この記事から窺い知ることができよう。しかし、それ以上に注目すべきなのは、この記事が国外向け新聞に掲載されたことである。つまり、政府はこの記事を通して、国民が多大な関心を寄せるサンテリーアというカルトがキューバに存在することを国外に喧伝しているのである。

『キューバのオリーチャ』で成功をおさめたボリーバルはその後も多くの著書を出版し、代表作だけでも次のようなものがある。国営の社会科学出版社からは、オリーチャへの供犠で用意する料理について共著で執筆した『アフロキューバの食事に関する神話と伝説 (*Mitos y leyendas de la comida afrocubana*)』(1993 年) と、サンテリーア信者が用いる「ヨルバ語」で「たくさんのお金」を意味する語をタイトルにし、占いについて説明した『オポロポ・オウォ (*Opolopo owó*)』(1994 年) が出版された。そしてキューバ作家・芸術家協会からは、イファの占いについての『キューバにおけるイファの歴史 (*Ifá: su historia en Cuba*)』(1996 年)、サンテリーアの呪術的対処法を記述した『キューバ—ある魔術的世界のイメージと物語 (*Cuba: imágenes y relatos de un mundo mágico*)』(1997 年) などが出ている。いずれも『キューバのオリーチャ』と同じく、サンテリーアの実践に関する手引書として読みうる本である。経済状況の悪化から出版事業が低迷しているキューバにおいて、このように一人の作家の新著がほぼ毎年出版されるのは極めて異例のことである。それを可能にしているのは、彼女自身の作家あるいは研究者としての評価もさることながら、なによりも彼女の著作が扱う内容、つまりサンテリーアの参考書としての価値であると考えられる。その理由は『キューバのオリーチャ』以降の出版状況に明らかである。ボリーバルの著作に限らず、サンテリーアをはじめとしたアフリカ系カルトに関する書籍は頻繁に出版されているのである。たとえば、社会科学出版社はオリーチャの名前を冠した「エチュ・ビ双書 (Colección Echú Bi)」を企画し、ボリーバルを含む複数の著者によるアフリカ系カルトに関する著作の出版を 92 年以降続けている。また、キューバのアフリカ系カルトに関する膨大な民族誌的著作を残したリディア・カブレーラ (Lydia Cabrera) の代表作『エル・モンテ (*El monte*)』も再版された。1954 年に初版が出たこの本は、キューバのアフリカ系カルト信者の植物に関する知識について、詳細にわたって書き留めた大著である。しかし、著者のカブレーラは革命直後の 1960 年マイアミに亡命し、革命政権に対する批判を続けていたことから、以後キューバ国内の研究者などは彼女の業績について言及することに慎重であった。それにもかかわらず、『エル・モンテ』が 1993 年に国営のキューバ文芸出版社から再版されたのである。さらに注目すべきなのは、研究者としての立場から書かれた著作に加え、著者が自らサンテリーアの入信者であることを明らかとしつつ、自分自身の信者としての

経験と研究の成果に基づいて、サンテリーアの知識を著した本が出版され始めたことである。たとえば、キューバ出版社は二人のサンテーロによる共著で全4冊のシリーズを刊行する予定であり、1997年にそのうちの2冊をすでに出版している。キューバ作家・芸術家協会からもやはり同様の本が数冊刊行されている。

これらの書籍の出版は、その内容からいってもキューバ政府がこれまで採用してきた脱コンテクスト化政策とは明らかに一線を画している。すなわち、国立民族舞踊団などが演じる、芸能化されたサンテリーアの儀礼音楽や舞踊とは異なり、『キューバのオリーチャ』にはじまるサンテリーア関連書籍の出版では、むしろ信仰の実践そのものに焦点があてられているのである。

たしかにサンテリーア関連書籍の出版は、信仰をめぐる国家理念の変更に伴う、脱コンテクスト化政策の修正という方針があってはじめて可能となったものである。しかし、これらの書籍が出版される理由は別のところにある。実は、『キューバのオリーチャ』より後に出版されたサンテリーア関連書籍は、主として外貨で販売されているのである。90年代に入ってからの経済状況の悪化は、国内の出版事情にも影響した。1991年以降、新聞・雑誌・書籍の発行部数が大幅に縮小され、国内市場向けの出版が先送りされたため、国内通貨で販売する書店に並ぶ書籍数は減少した。その一方で、主に外国人観光客を対象とした土産物店には、国内通貨販売の書店ではみられない新刊書が並べられ、外貨で販売されるようになったのである。また、従来はなかった、外貨でのみ販売される本も出版されるようになった。国内通貨で販売する書店は改装され、ドル販売の書店に転じていった。そして、キューバ人が競って買い求めたと報じられた『キューバのオリーチャ』も、1994年に増補改訂版として装丁も新たに再版され、ドルショップの店頭に並べられた。要するに、相次いで出版されるサンテリーア関連書籍は、外貨獲得をねらった商品として販売されているのである。93年に外貨所持を認められたキューバ国民がこれらの書籍を購入することは、もちろん可能である。しかし、外貨を所有している人は全国民の3〜6割であり(佐野 1997:56)、しかも彼らが外貨で購入するのは、配給や農産物市場で入手しにくい食料品や日用品が中心となっている。10ドル前後で販売されている書籍を購入する余裕のある国民はまだ少ない。したがって、サンテリーア関連書籍の出版はキューバ国民よりもむしろ、キューバを訪問する外国人を対象として販売されているのである。

### (iii) 外貨獲得源としてのサンテリーア

経済状況が深刻化するキューバで、観光産業の重要性が急激に高まっていることはすでに指摘した通りである。観光客数を増加させるためには、観光客の期待に見合うサービスや観光商品の提供が必要である。このような状況の中でサンテリーアの信仰そのものがもつ、外貨獲得源としての可能性が浮かび上がってきたと思われる。かねてから芸能化されたサンテリーアの儀礼音楽や舞踊は、ほとんどの観光客向けのショーに含まれており、サンテリーアに関して何ら予備知識をもたずにキューバを訪れた観光客であっても、その一端に触れる機会は常に与えられていた。ただし、この場合、あくまでもサンテリーアはキューバらしさを醸し出す芸能として位置付けられていたのである。しかし、キューバを訪れる観光客の中には、単なる芸能としてのサンテリーアに接するだけではなく、キューバで実際に信仰されているいわゆる「本物」のサンテリーアに触れたいという願望をもつ人も少なくない。90年代後半から出版が増加したキューバの旅行用ガイド・ブックの中には、サンテリーアを囲み記事として取り上げているものがいくつかあり、中にはキューバの国営観光企業が用意しているサンテリーアの占い体験ツアーの情報を掲載しているものもある(Baker 1997:105)。またメキシコでは、サンテリーアの知識や占いに関する雑誌『サンテリーア(*Santería*)』が1993

年に創刊された。そしてこの雑誌には、このカルトについての講演や信者との交流が含まれた「アフロキューバ習合的カルト・プログラム」と題されたキューバへのツアーの広告がしばしば掲載されているのである。

さらには、観光よりもサンテリーアの実践や国内信者との交流そのものを目的にキューバを訪問する外国人、あるいは亡命キューバ人もいる。旧キューバ科学アカデミー社会宗教研究局によるキューバのアフリカ系カルトに関する研究報告、『通称習合的カルトと交霊術 (*Los llamados cultos sincréticos y el espiritismo*)』(1991 年) は、米国やラテンアメリカ・カリブ諸国でキューバのアフリカ系カルトに対する関心が広まっていることを指摘し、「これらの信仰によれば、信仰の 'original (fundamento)' はキューバに存在するのであり、したがって人々は、入信儀礼や他の儀礼を実施したり、カルトの指導的信者や宗教グループと接触するためにキューバを訪れる」と報告している (Argüelles Mederos, et al. 1991:219)。なお、ここでいう「原理」とは、キューバのアフリカ系カルトにおける霊的力そのもの、あるいはその力が宿る物を意味する語である[12]。たしかにサンテリーアは、革命後、国外に亡命するキューバ人が増加するとともに、米国やラテンアメリカ、さらにはスペインなどヨーロッパにまで広がっていった。しかも、亡命キューバ人を媒介としてサンテリーアを知り、信者となる非キューバ人も多く、国外の信者数は増大している[13]。先述の報告が指摘するように、サンテリーアを信仰する亡命キューバ人や、彼らを通してサンテリーアに関心を持った外国人が、キューバ国内の信者との接触を求めてキューバを訪れるとしても不思議はない。そして、実際に彼らがキューバを訪れていることは、次に述べるキューバ国内での現象からも説明できる。

キューバ国内の信者の間では、近年の現象としてサンテリーアの「商業化 (comercialización)」が指摘され、批判の対象とされている。「商業化」とは営利行為としてサンテリーアを実践する風潮のことをさし、とりわけ、外国人やドルを所有しているキューバ人に対して、占いや儀礼執行の手数料として割高な金額をドルで支払うよう請求する行為を批判するときに、この言葉は用いられる。また、このような行為を行う入信者を批判的に言い表す、ディプロ・ババラオ (diplo-babalawo)[14]という新語もすでに信者の間で定着しつつある。このような言葉が流布しているということは、それだけで十分に、キューバを訪れサンテリーア信者に接触し、占いや儀礼などを体験する国外信者が今日いかに多いかを物語っているのである。

一連のサンテリーア関連書籍の販売は、このようにサンテリーアの信仰そのものに関心を抱いてキューバを訪れる観光客や信者を対象としている。そして、キューバ政府が彼らに対して用意している商品は書籍ばかりではない。信者のインタヴューを交えながらサンテリーアについて解説しているビデオや、入信者を監修者の一人として制作された CD-ROM なども販売されている。もちろんこれらの商品が、キューバ国民を対象として販売されていないことは明らかである。ビデオやコンピューターを所有している家庭はキューバではわずかでしかない。また、アフリカ系カルトに関連する祭具等を数多く所蔵していることで知られているグァナバコア博物館は、90 年代初め頃まで地元グァナバコアの歴史に関する展示も行っていた。しかし、1998 年現在同博物館は、改装中の本館とは別

[12] たとえばサンテリーアの場合、いくつかのオリーチャの「原理」は儀礼的手続きを経た石であり、この石はオリーチャそのものとみなされる。

[13] キューバ国外のサンテリーア信者数に関する統計資料は存在しないが、たとえば現在の米国には革命当時のキューバよりも多くのサンテリーア信者がいると判断する研究者 (Brandon 1997:104) や、ニューヨーク市に在住する信者だけで 5 万人と推定する研究者がいる (Cornelius 1991:141)。

[14] この名称は、かつてドルショップがまだ数少なかった頃、外交官などキューバ在住の外国人を対象とした外貨払いの店などを、「diplomático(外交官)」の略語「diplo」をつけて diplo-mercado(ドル市場)、diplo-tienda(ドルショップ) などと呼んでいたことに由来している。

の建物で展示品の一部、それもサンテリーアに関連する所蔵品だけを公開している。しかも、展示室より広いスペースがサンテリーア関連図書やアフリカ系カルトをイメージした土産物を販売する観光客用売店として利用されている。そこで販売されている英語と西語の博物館パンフレットには、『グアナバコア博物館―豊かなアフロキューバ伝統 (*Museo de Guanabacoa: Un caudal de tradiciones afrocubanas*)』というタイトルがつけられており、その大部分がサンテリーアの解説に当てられている。グァナバコア博物館は、観光客を対象としたアフリカ系カルト専門の博物館として作り変えられているのである。

このように、サンテリーア及びその信者の存在そのものが、国外からの訪問客を引き寄せられるキューバ独自の「観光商品」となってきているのである。したがって、サンテリーアに対して脱コンテクスト化政策を行ってきたキューバ政権は、いまや一転して信仰というコンテクストそのものを国外に向けてアピールし始めた。サンテリーア関連書籍の相次ぐ出版は、まさにサンテリーアの「観光商品」化の一例なのである。

### 3.「真正な」知識の普及

今までみてきたように、1990 年代に入ってから、サンテリーア信者に対するキューバ政府の対応は大きく変化してきている。宗教信者のキューバ共産党入党を認可したことに加え、観光開発の高まる必要性を背景として、政府は書籍の出版、ツアーの企画などサンテリーアの「観光商品」化を具体的に進めているのである。これは、政府が芸能化したサンテリーアだけでなく、信仰というコンテクストそのものをも利用する方針を選び始めたことを物語っている。ではこのような政府側の変化は、サンテリーアの信者にどのように影響するのであろうか。まだキューバの観光開発は始まったばかりであり、したがって政府側のサンテリーアに向けた変化自体が進行中である現時点で、この問いに対する結論を出すのは時機尚早であろう。したがってここでは、すでにあらわれつつある変化の兆候を整理、検討することで、サンテリーア信者が今後いかなる方向に進みうるかについて展望を立てておきたい。

まず何よりも顕著になっているのは、サンテリーアの「活性化」である。共産党が信者の入党を認可したことにより、あらゆる宗教の信者は、自分が信者であることをはばかりなく表明できるようになった。サンテリーア信者とて例外ではない。「信者に共産党入党が認められてから、自分が信者であることを隠すことも、偽ることもなくなった」と述べるサンテリーア信者は多い。さらにサンテリーアの場合、政府がこの信仰を率先して「観光商品」化し、その存在を目立たせていることも手伝い、サンテリーアの実践は以前よりもはるかに自由に行えるようになってきた。また、信者たちの話によれば、儀礼が実施される頻度が以前より増しただけでなく、ここ数年で入信者は急激に増加したという。もちろん長引く経済不況によってもたらされた生活への不安は、信者増加の大きな要因であろう。しかし、そればかりではない。より開放的にサンテリーアを実践できる条件が整ったこともまた、入信後の社会生活に抱く不安を減じたという点で、信者増に貢献したのである。現在ハバナの市街にはサンテリーアの儀礼に必要な植物や祭具類を売る店までが政府の個人営業許可を得て開業し、それらの店を訪れる人は後を絶たない。いまや信者は他人の目を気にすることなく、公然とサンテリーアを実践しているのである。

このように、宗教に対する政府の寛容化および「観光商品」としてのサンテリーア利用は、表面上サンテリーアの「活性化」を促している。しかしながら、信仰そのものの商品化、とりわけ信仰に関連する書籍の出版は、さらにサンテリーアそのものに変容をもたらす可能性すら含んでいるのである。「観光商品」として外貨で販売される本であっても、キューバ国民が入手

することは可能である。すでに述べたように、外貨で販売される本は国民にとって非常に高価である。しかし、外貨の所持・使用が認められている現在、必要と判断さえすれば、みずから貯えた外貨で本を買うことはできる。また多くの場合、新刊本出版に際して発売キャンペーンの開催が国民に告知される。このキャンペーン会場では、部数が限られているとはいえ、新刊本が国内通貨で手ごろな値段で販売される。さらには、闇市場で入手することも可能なのである。もちろん、それでも入手できる人はかぎられている。しかし、主に口承によって膨大な知識を習得しなくてはならないサンテーロにとって、参考書に類する書籍の出現は歓迎すべきことである。したがって知識の習得に熱心な信者であればあるほど、それらの本を入手したいと望むであろう。そして実際、本を利用している信者は少なからずいる。筆者自身も『キューバのオリーチャ』を入手してほしいと信者から頼まれたり、その他のサンテリーア関連書の複写を依頼されたことがあった。彼らは知識修得の助けとして本を求めるのである。だが、信者たちにとって本の出現の効果はそれだけではない。本は、自分の信仰が「真正な」ものであるかどうかを確認する手段ともなる。自分の知識が本の記述と一致していれば、その信者はみずからの知識が他の信者にも受け入れられていることを知るであろう。つまり本の出現は、信者が共通に参照できる基準の登場でもあるのだ。そして、ある特定の本に対する信者の信頼が大きいほど、彼はその本自体を「真正な」ものとして受け入れるのである。信頼するか否かの指標は、何も内容だけではない。著名な出版社から発行されているか、あるいは題名や著者が広く社会に知られているかなども十分に信頼の指標となりうる。調査中に筆者は、「この宗教について知りたいならば、この本を読みなさい」、あるいは「これから始まる儀礼は、ここに書かれている」といって『キューバのオリーチャ』を信者から差し出されることがあった。このような信者の言葉は、「ベスト・セラー」となったこの本が彼らにとって信頼に足り、また一種の「真正性」を帯びて立ち現れていることを示唆するものである。つまり、サンテリーア関連図書の出版は、本が信仰の「真正性」を主張する拠り所となって普及する可能性を開いたのである。

また逆の見方をすれば、本の出版はサンテリーアの「真正な」知識を信者に共有させる最善の手段となる。信者の中には、修得した知識の内容が信者によって異なり一貫性がないというサンテリーアの現状を否定的にとらえ、みずからの経験と研究成果から得た「真正な」知識を、他の信者に分け与えたいと望む人々がいる。国内の出版社によるサンテリーア関連書籍の出版開始は、そのような人々が望みを実現するために具体的な行動をとること、つまり自分の「真正な」知識を本にすることを可能にした。

たとえば、すでにキューバ作家・芸術家協会から 2 冊の本を出版しているババラオ、アドリアン・デ・ソウサ・エルナンデス (Adrián de Souza Hernández) は、現在のキューバには十分な知識が存在していないと考え、ナイジェリアにまで赴いて研究を重ねた。「真正な」知識をすべて修得したと自負している彼は、その知識を書き留め、人々に伝えることこそが神によって指示された自分の義務であるとし、すでに全 27 冊の本を書き上げた。彼の目下の望みは、彼が聖書に喩えるこれらの本を順次キューバで出版していくことであるという。外貨獲得を目的として開始されたサンテリーア関連書物の出版は、はからずもデ・ソウサのようにみずからの知識を普及しようとする信者に利用されている。むろん、自分の「真正な」知識を普及しようとしている信者はデ・ソウサだけではない。したがって、信者によって書かれた本の出版が増加するとともに、複数の異なる「真正な」知識が普及していくことになる。これらの知識が信者に「真正な」ものとしてどこまで受け入れられ、共有されていくのか。この問いに対する答えはいまだ予測しがたい。しかし、そのいずれかがやが

て権威を獲得して、サンテリーアの教典となっていく可能性もまた否定しきれないのである。

## おわりに

経済不況に伴う国民生活の変化、急速な観光開発に加え、宗教に対する国家理念の修正、さらに、脱コンテクスト化から一転して信仰そのものを利用したサンテリーアの「観光商品」化と、90年代に入ってからサンテリーア信者をめぐる状況は大きく変化している。これらの変化はサンテリーアを「活性化」させただけではなかった。この変化を機に、すべてのサンテリーア信者が共有する規範や知識を定め、信者を統一していこうという試みが表面化し、具体的な実行に移されつつある。しかし、この試みが障害なく信者の統一を実現できるとは予想し難い。統一の試みは単一ではない。複数の信者が各々に異なる「真正な」知識を主張しあい、互いの勢力を牽制しあっているというのが現実である。そして、実際に勢力を拡大していくにあたっては、サンテリーアに既成の権威が存在しない以上、権威をいかに獲得するかではなく、むしろ権威をいかに形成するかが今後の争点となるであろう。

また、サンテリーアの権威をめぐる争いの中で、特に注目されるのは、1991年に法務省の認可を得て、「文化団体」として発足したキューバ・ヨルバ文化協会 (Asociación Cultural Yoruba de Cuba) である。この団体は公式には「文化目的」を掲げつつも、実質的には「サンテリーア信者の統一」を目的としており、現在登録している5,000人の会員のほとんどは信者である。同協会はいまだ活動の拠点となる事務所を開いておらず、現在までに3回開催した「ヨルバ国際会議」以外に、際だった活動を展開するには至っていない。そのため会員の約8割はいまだ会費を払わずに登録をしているだけという状況である。しかし、サンテリーア信者を組織する唯一の政府公認団体であること、さらに、協会が実施する審査の合格を入会資格の条件とし、会員の選別を行っていることなどを考慮すると、この団体がサンテリーアの権威を形成していく可能性は大いにある。筆者はこの協会についていまだ調査過程にあるため、本稿では十分な分析を示すことができなかったが、同協会が今後どのような活動を展開し、サンテリーアの「真正な」知識の普及をめぐる争いにいかに関わってくるのかは興味深い点である。

普及し始めた複数の異なる「真正な」知識が、どのような権威形成を伴いながら、いかに勢力を拡大していくのか。90年代に入って活発化するサンテリーア信者の今後の動向が注目される。

附記：本稿は財団法人松下国際財団の研究助成（1997年度前期）による研究成果の一部である。

## 参考文献

Argüelles Mederos, Anibal, et al. 1991. *Los llamados cultos sincréticos y el espiritismo.* La Habana: Editorial Academia.

Baker, Christopher P. 1997. *Cuba Handbook.* Chico, California: Moon Publications.

Betto, Frey. 1987. *Fidel and religion: Talks with Frei Betto.* Havana: Publications Office of the Council of State. 〔後藤政子抄訳「カストロの思い出」『カストロ革命を語る』（後藤政子編訳）所収、1995年、同文館出版〕

Brandon, George. 1997. *Santeria from Africa to the New World: the dead sell memories.* Bloomington, Indianapolis: Indiana University Press.

Colina, Cino. 1991. A Cuban best-seller: Understanding Afro-Cuban Religion. *Granma International* March 10, 1991, p.6.

Cornelius, Steve. 1991. Drumming for the Orishas: The Reconstruction of Tradition in New York City. In *Essays on Cuban Music: North American and Cuban Perspectives.* Peter Manuel, ed. Pp.139-155.

Lanham: University Press of America.
江口信清 1991.「社会主義か死か―キューバ社会主義と観光」『立命館史学』12:53-77.
工藤多香子 1998. 「『文化』をめぐる戦略と操作の相克―キューバ・サンテリーアの儀礼太鼓バタを中心として」『民族学研究』62(4): 494-516.
León, Argeliers. 1961. La expresión del pueblo en el TNC. *Actas del Folklore* 1(1): 5-7.
マルケッティ・ノダールセ、イラム 1996. 「キューバにおける外貨流通の自由化―成果と課題」『ラテンアメリカ・レポート』13(3): 31-38.
Moore, Carlos. 1988. *Castro, the Blacks, and Africa.* Los Angeles: Center for Afro-American Studies, University of California.
Oppenheimer, Andres. 1992. *Castro's Final Hour.* New York: Touchstone.
PCC (Partido Comunista de Cuba). 1976. *Tesis y resoluciones: Primer congreso del Partido Comunista de Cuba.* La Habana: Departamento de Orientación Revolucionaria del Comité Central del Partido Comunista de Cuba.
ポンス、ウーゴ・M. 1996. 「キューバ経済の現状と課題」『ラテンアメリカ・レポート』13(3):23-30.
佐野誠 1997.「経済改革の現状と問題点」『アジ研トピックリポート：キューバ　国際環境への適応と経済改革』山岡加奈子編、41-58 頁、東京：アジア経済研究所。
山岡加奈子 1997.「外国投資の進展：社会主義体制のなかでの開放」『アジ研トピックリポート：キューバ 国際環境への適応と経済改革』山岡加奈子編、59-73 頁、東京：アジア経済研究所。